

■ ルールーvs バトルファック連盟

——バトルファック！ それは男女が互いのプライドを懸けて性の技を繰り広げ合う競技である！
そして『BF連盟』はバトルファックを普及するため日夜ハッスルする組織である！
今日も連盟の普及活動として、新たな犠牲者が招かれた！

犠牲者の名はルールー。クライアス社に勤務する女アンドロイドである。
連盟は彼女が連盟でバトルファックをしやすいよう、戦闘に必要な部品をこっそり奪った。
その部品をファイトマネー扱いにすることで、バトルファックするキッカケを作ってあげたのだ！
更に勝利報酬として、彼女が分析対象としている『人間の感情』についての情報まで用意！
部品を取り戻すため、人としての感情を手に入れるため……ルールーの戦いが今 始まる！

「一体、いつの間にわたしの戦闘用回路を奪ったというのですか……
しかし、バトルファックとやらで勝利すれば返してもらえ、しかも感情まで与えてくれる……
信憑性は低いですが、試す価値はありそうですね」

◆ BF連盟のバトルファックルール

対戦形式……

『エンドレス』 + 『勝ち抜き戦』

制限時間なし、精力が尽きる or 失神でKOされる、もしくは降参で決着がつくまでの真剣勝負。
それを繰り返し、連盟が用意した五人の男性選手を全員敗北させれば勝利となる。

基本ルール……

BF連盟のリング上、男女それぞれ一人ずつによる一対一の対戦。

絶頂や精力が残っているかはリングや会場の快感センサーや審判の判断で判定される。ただし選手の状態によっては続行可能の確認や意思表示が必要。

意思表示には言葉での自己申告の他、自ら行為し続ける、勃起を見せる、ファイティングポーズやピースサインを見せる、などでOK。

リングは連盟が制作した特殊仕様で、近寄ると攻撃系の能力が制限・封印される。

敗北条件……

精力が尽きる、失神、降参、ルール違反など。他、審判が続行不能と判断した場合。
ただし試合を盛り上げるため、KO間近と思われる際などでの降参は無効と判定されることがある。
一度絶頂しても精力があれば続行可能。

禁止行為……

凶器・ドーピングの使用。
性交、快感を与える目的やそれに類するもの以外の攻撃的行動。
避妊具等の使用については自由。

ルールーはバトルファックの経験など皆無。しかしアンドロイドであるため感情に乏しい分、
いわば不感症であり、性感についても耐性がある。
絶頂したら負けというバトルファックにおいて、それは非常に有利。
運動能力も常人の比ではなく高く、これらの要素を考慮すれば容易に勝利できるだろう。
そう安易に考え、ルールーはリングへと上がる……

◆

「……これは……想定外です」

【んおおっ！ で、出るうっ！】

ビュクッ♥♥ ビュルルルルッ♥♥

『ここで射精、そして試合終了——！ ルールーの見下し手コキで四人目の男もあっさりとイッてしまった！

これは女性初の五人抜きなるか?!』

(弱すぎる……ここまで弱いとは想定外……)

淡々とした目で見つめながら男のペニスを扱き、射精させたルールー。

これで四人目の男に勝利し、残すはあと一人となった。
自身の能力から、勝利すること事態は予測できていたが……一人目から四人目まで、
ほぼ同じような流れで圧勝しており、あまりにも出来過ぎていることに逆に困惑してしまう。
もしやこれもBF連盟の計算の中で、調子付かせて実力を勘違いさせた後に真の性豪と戦わせる、
ということではないか。
そんな企みを勘ぐってしまうが……

(何にせよ、やることは変わらない。次も勝っただけ……)

『さあ、いよいよラストチャレンジ！ これに勝てればルールー選手は晴れて勝利です！
最後の相手は淫魔！ 連盟が誇る王者の一人です！ 果たして勝つのはどちらか——?!』

最後の対戦相手は人間の青年そっくりなショーツ一枚の淫魔。やはり今までの四人とは格が違うようだが……
四人と戦ったとはいえ圧勝すぎたというのもあり、まだ経験不足なルールーには多少運動能力が高い、
程度にしか違いが分からない。
逆に言えば、目に見えるほどバトルファッカーとしての性能に差は見られないということだ。
警戒はしても、臆することなく対峙する。

【へえ、あんたが今回の挑戦者か】

「はい。よろしくお願いまし」

がしっ♥

「んおほっ♥♥」

(なっ?!♥ まだゴングは鳴ってないはず♥ 何を——♥)

互いに見合ったその時、いきなり淫魔がルールーの胸を鷲掴みした。
予測していない行動にルールーは反応できず……しかも揉まれた瞬間、体温が高まったような、
電流が走ったような、未知の感覚に包まれ、素っ頓狂な声を上げてしまう。

「っ……何をされるのですか！」

【おっと驚かせたなら悪い、今のはバトルファッカーにとっての握手みたいなもんだ。
もし感じまったらなら悪いな】

「……いえ、問題ありません」

(今のは一体まさか快感？ ……いえ、わたしが感じるはずがない。ただのエラー……
今の刺激に対応できるようアップデートすれば問題ない)

五人目にしての急な“握手”を疑うが……予想外な感覚をエラーと切り捨て、冷静に分析し直す。

(対戦相手のペニスはサイズ、硬度、温度、匂い……どれも一線を画している。だが、全て想定内。
戦闘シミュレーション……完了。二分三十秒で二度目の射精によりKO勝利)

計算し、やはり自分の勝利を確信。
先ほどの感覚も忘れ、早くも報酬を持ち帰ることまで考える余裕を取り戻す。

◆試合開始！

『さあゴングが鳴りました！ ルールーはいつものように速攻をかける！』

効率を求めるため、ルールーの戦術は速攻特化だ。
身体能力を活かし、後ろを取って手で扱く。それで今までの四人も一度目の射精に導いてきた。
今回もあっさりと後ろから組み付き、巨根を手に取り……

ぎちゅっ♥

(まずは一度目の攻撃。これで射精する確率五八%……)

ぐちゅうっ♥

「っっっ?!♥♥」

と、そこで再びエラーが発生。男が後ろ向きにも関わらず手でルールーの股間を弄ったのだ。背後への責めだというのに正確、かつ今までの相手とは別格の強烈な刺激に思わず離れて距離を取る。

(エラー発生……っ♥ 相手の柔軟性が予想以上であり、想定外の反撃を受けた……
しかし、それだけではこの反応の説明がつかない)

肉体の反応。その原因が何なのか、予測を超える事態に考え込んでしまう。
一体どこに、不安定かつ未確認の要素があるのか。
思案する間に距離を詰められ、今度は正面から本格的に責められる。

「っ?!」

(しまっ、防御——)

ぐちゅううっ♥♥

「っ♥♥ おほ……っ♥♥」

(防御失敗♥ またエラーが……っ♥)

【お? 鉄面皮マンコって聞いてたが、なんだよヌレヌレじゃねえか】

「濡れて、など……はおおうっ♥」

(なぜ体液が分泌されて……♥ この感覚は何なのですかっ♥)

反応が間に合わず、移動では避けられない。ならば手を払いのけようとするが、その前には既に刺激されており、牝褌をかき回されて苦悶の声を上げさせられる。せめて力尽くでと男の手を掴むも、エラーで脱力して押し退けられない。

【どうした、急に動き鈍くなったな……俺の手マンが気に入ったか?】

ぬちゅっ♥ にぢゅうっ♥

「っ♥ 想定外のことに、エラーが発生した、だけです……!

あなたの技術を気に入る可能性は、〇・一パーセ」

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ♥♥

「んおっ♥♥ おっ♥♥ おお〜っ♥♥」

(えっ♥♥ エラー発生っ♥♥ 理解できない感覚がっ♥♥ 溢れてっ♥♥)

ビクンと仰け反ったことで責めから離脱できたが、感覚の余韻で脚が震えている。淫魔はその隙を見逃さず詰め寄り、今度はルールーが後ろを取られる。大きく豊満、それでいて厭らしさのない胸。それに淫魔の指が食い込み、同時に先端も摘まみ上げる。大胆で乱暴、かと思えばこの上なく繊細な責めに胸が“握手”の感覚を思い出して張り詰め、乳首が疼いて固くなっていく。秘部も一緒に同じ間隔で弄られると、まるで乳首と陰核が繋がったように疼きが同調し、相乗効果で増幅した媚熱が全身に広がっていく。

もみっ♥ ぎゅむ♥ くりいっ♥

「んひいっ♥♥」

(胸♥♥ 乳首も♥♥ い、陰核まで同時にされたら♥♥)

「んおううっ♥♥」

【やっぱり感じてるじゃねえか】

「そんなことはありません♥♥ わたしは何も感じてなど♥♥ っ感じることなどおほおっ♥♥」

(エラー増幅♥ 理解不能の感覚に支配される……このままでは危険っ♥ 離脱しなければ♥♥ あ♥♥)

「感じてませんからっ♥♥ やめなさい♥♥ あ……っっ♥♥」

ぐちゅんっ♥♥

「んあっ♥♥♥」

プシュッ♥♥ プシヤアアアッ♥♥

『ここで絶頂——！　なんと今までノーダメージ同然だったルーラーが先に達してしまった——！
更にダウン、追撃がないのでカウントが入ります！　流石はチャンプ、前戯だけでも凄い威力です！』

「あ♥♥　お……っ♥♥」

(何が起きたというのですか♥♥　謎のエラーでショートが発生し、思考が途切れて♥♥

まさか本当に快楽を感じて……絶頂をしたとでも？♥♥　そんなことは有り得ないっ♥♥)

『カウント4で立ち上がった！　しかしチャンプの起き責めが……おおっ、これを華麗に躲す！』

快感と絶頂を否定して立ち上がり再開。すぐに淫魔が狙ってくるが、それを宙返りで回避、着地と同時にフェラを仕掛けようと淫魔のショーツをズラすが……

【っ?!】

(今です！　フェラチオで一気に——)

びきんっ♥♥

「なっ♥♥」

(サイズ硬度温度その他どれも想定内——しかしっ♥♥　急に迫力が増して♥♥　これは一体っ♥♥)

飛び出た巨根に、ルーラーは目を丸くしてしまう。

大きさも質感も全て想定内……のはずなのだが、いざ間近で見ると、異様な迫力を感じてしまったのだ。

アンドロイドらしからぬ、恐怖、高揚、期待といったものに近い感覚に、またも動きが止まり、

そこを淫魔に付け入られる。

【どうした？　今度はチンポが気に入ったか？】

「ち……違います……ペニスを……気に入るなどっ♥♥」

【そうかい、なら嫌でも気に入らせてやるよっ！】

がしっ♥　ぐぼおっ♥♥

「おごおおっ♥♥」

『ルーラーここからフェラ……どうした動きが一瞬止まった?!　そこに淫魔がイラマ責め！

口とはいえ、ついにペニスがルーラーに挿入された——っ！』

口内に巨根が侵入し、責めるはずだったモノから逆に喉を責められる。

えずくような不快さ、なのに拒めない妙な感覚で衝撃を受けたルーラーに対し、

初の挿入に会場が沸き立っていく。

歓声が聞こえたことで大勢からの視線を感じ、羞恥を抱く。

アンドロイドには無いはずの感情を植え付けられる喉姦に、ルーラーは頭も思考も揺さぶられる。

「んぶっ♥♥　ぼっ♥♥　んっふ♥♥　むぶううっ♥♥」

【おおっ、なかなかの喉マンコだな。そっちはどうだ？　しっかりしゃぶってくれよっ！】

ぐぶっ♥　じゅっぼおっ♥

「むっぐ♥♥　んむううんっ♥♥」

(わたしは♥♥　何をしてっ♥♥　つい見惚れてしまった……♥♥

喉が突かれるたびに、体温が更に上昇してしまうっ♥♥　このペニスにどんな秘密がっ♥♥)

自分のダメージや状態を考えるのに精一杯で、されるがままに突かれ続ける。

ペニスを気に入ったわけではないが、強い興味を抱き、何か秘密でもあるのかと考えそうになったところで、やっとな反撃を思い出す。

(いけないっ♥♥　反撃を……♥♥)

ごぢゅんっ♥♥

「んぐあっ♥♥　んご♥♥　おおおお……っ♥♥」

が、そこで一際強く打たれて目が一瞬上を剥く。反撃どころか機械人形特有の冷めた視線はすっかり肉責めに豹変し、しかしそれを戻す余裕もなく、連打されて再び同時愛撫の時の昂ぶりが込み上げる。

『激しいイラマ連打責め！ ルールーはこれで感じているのか？！

冷静なサディストかと思いきや、喉をオナホのように使われて快感が溜まっていく——！』

「かっ♥♥ かんじへっ♥♥ なるっ♥♥ おぼおおっ♥♥」

【感じまくりなのがバレバレなんだよ！ おらっ喉マンコでイッチまえっ！】

ずぼっ♥ がぼっ♥ ぐぼっぐぼっぐぼっぐぼおっ♥

「んんむっ♥♥ でひゅからっ♥♥ かんじへらんかあっ♥♥ おぼっ♥♥ んんう——っ♥♥」

(感じてないっ♥♥ 感じてなどいないはずなのにっ♥♥ あと八秒でまたあの現象が♥♥

回避——できないっ♥♥ あ♥♥ 三♥♥ 二♥♥ 一……っっ♥♥♥)

ぐぼおんっ♥♥

「んぶううううううううううっ♥♥♥♥」

(エラーがっ♥♥♥♥ 喉から♥♥♥♥ 全身にいいいいっ♥♥♥♥)

『再び絶頂——！ 珍しいイラマチオでの絶頂！ あのルールーが別人のようにイカされまくる！

これが淫魔が持つ淫気力なのか？！』

(淫気……♥♥ そんなものが実在するとでも……♥♥ だとすれば……データ不足……対応不能っ♥♥

では……♥♥ やはり私は……絶頂して……♥♥)

観客たちがヒソヒソ話していたのを聞いただけの、《淫気》なる強制発情能力。

最初は軽視していたが……もしそれがルールーにも十分な効果を発揮しているというのなら、

今の状況にも合点がいく。

今まで感じていたエラーはやはり快感であり、愛撫で、そして今もイラマチオ責めで絶頂している……

アンドロイドの自分にも性的興奮を強いる魔力に一瞬怖気が奔るが、

逆に謎の要素が判明したことで吹っ切れる。